

大 藪 遺 跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

大 藪 遺 跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび建物新築工事に伴う大敷遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

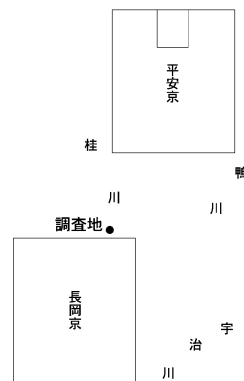
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|-----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 大藪遺跡・下久世城跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市南区久世殿城町 527-1、528-1、814-3 |
| 3 委 託 者 | 嶋岡良弘 |
| 4 調査期間 | 2007 年 2 月 1 日～ 2007 年 3 月 8 日 |
| 5 調査面積 | 295 m ² |
| 6 調査担当者 | 西森正晃 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「久世」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付け、遺構種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 図版順に通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 自然化学分析 | 竜子正彦 |
| 18 本書作成 | 西森正晃 |
| 19 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・山口 眞 |



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査の経緯	1
2. 遺 構	3
(1) 基本層序と遺構の概要	3
(2) 弥生時代後期の遺構	3
(3) 平安時代後期から鎌倉時代の遺構	10
(4) 室町時代の遺構	11
3. 遺 物	14
(1) 遺物の概要	14
(2) 弥生時代の遺物	14
(3) 平安時代後期から鎌倉時代の遺物	17
(4) 室町時代の遺物	18
4. ま と め	19

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1	調査区南側全景 [平安時代後期から室町時代] (北から)
		2	調査区北側全景 [平安時代後期から室町時代] (東から)
図版 2	遺 構	1	調査区南側全景 [弥生時代] (北から)
		2	住居 104a (北から)
図版 3	遺 構	1	住居 104a 炭化物出土状況 (東から)
		2	炉 119 (北から)
		3	住居 104b (北から)
図版 4	遺 物		出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：5,000）	1
図 2	調査区配置図（1：1,000）	2
図 3	調査前全景（南東から）	2
図 4	作業風景	2
図 5	西壁断面図（1：50）	4
図 6	弥生時代の遺構平面図（1：150）	5
図 7	住居 104a 平面図（1：50）	6
図 8	住居 104b 平面図（1：50）	7
図 9	住居 104 断面図（1：50）	8
図 10	住居 104 柱穴断面図（1：40）	9
図 11	砥石出土状況（南から）	9
図 12	平安時代後期から鎌倉時代の遺構平面図（1：150）	10
図 13	室町時代の遺構平面図（1：150）	11
図 14	建物 1 実測図（1：100）	12
図 15	溝 81・90・176 断面図（1：40）	13
図 16	住居 104a・b、土壇 117 出土土器実測図（1：4）	15
図 17	溝 186 出土土器実測図（1：4）	15
図 18	石器実測図（1：2）	16
図 19	平安時代後期から鎌倉時代の土器実測図（1：4）	17
図 20	溝 81・90 出土土器実測図（1：4）	18
図 21	柱 11・106 出土土器実測図（1：4）	18
図 22	弥生時代・室町時代の遺構配置図（1：1,000）	20

表 目 次

表 1	遺構概要表	3
表 2	遺物概要表	14

大 藪 遺 跡

1. 調査の経緯

今回の調査は、建物新築工事に伴う発掘調査である。調査対象地は、京都市南区久世殿城町に位置し、弥生時代から江戸時代に至る大藪遺跡に含まれ、中世居館跡とされる下久世城跡推定地にも該当している。京都市文化財保護課による試掘調査の結果、耕作土直下で遺構の存在が確認されたことから発掘調査を実施することとなった。

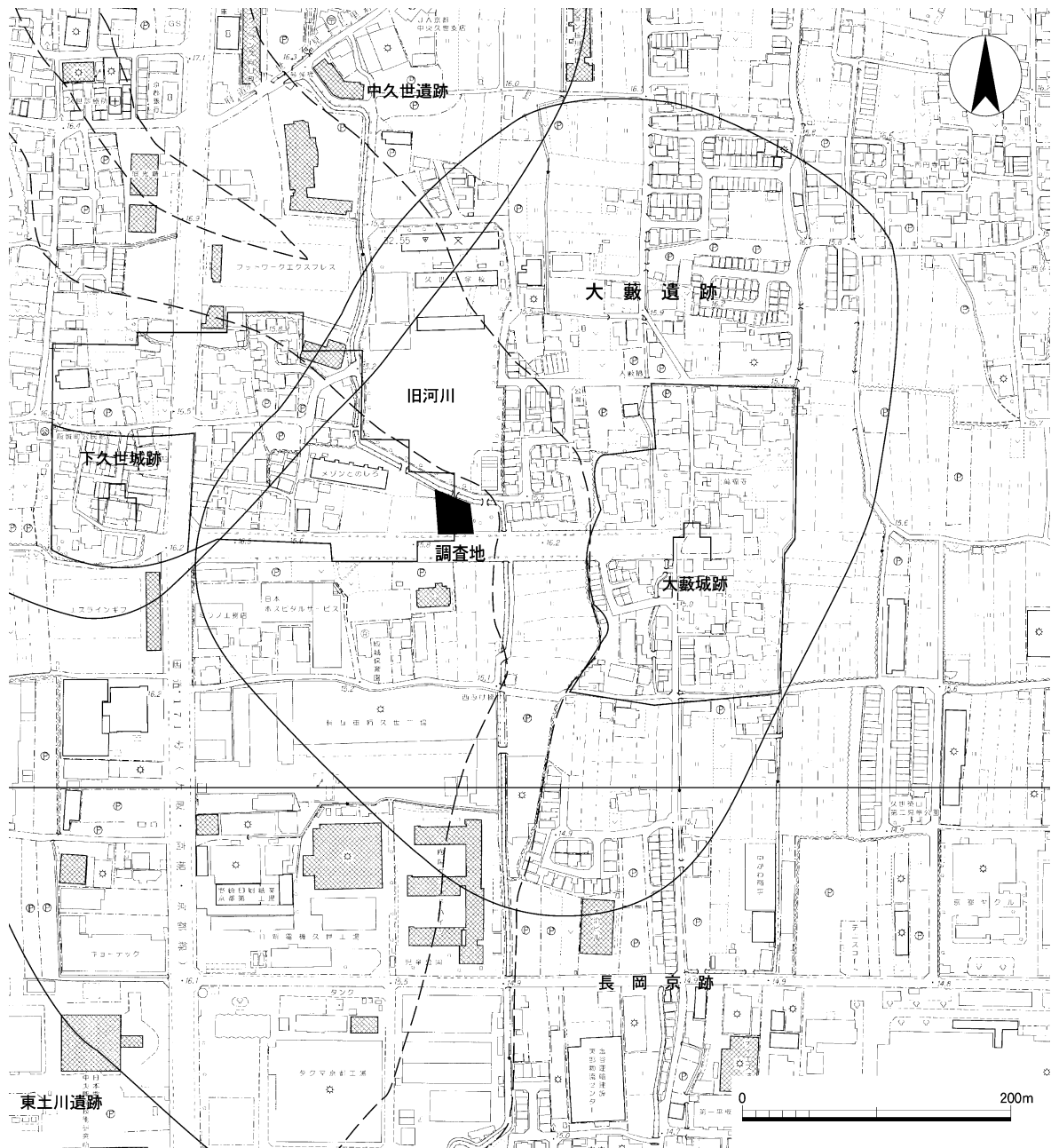


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

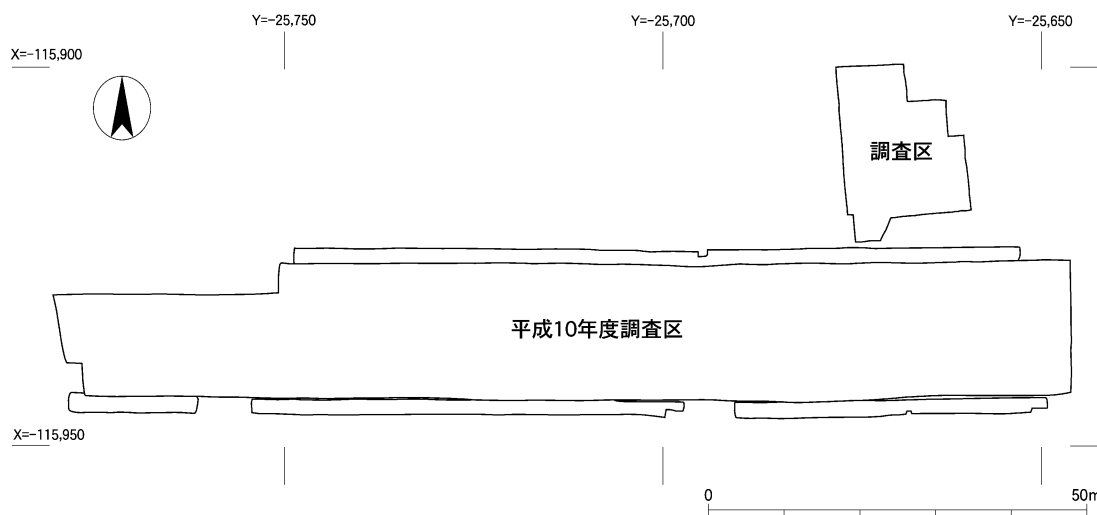


図2 調査区配置図（1：1,000）

これまでの周辺調査から、大藪遺跡内には北西から南東に流れ、本調査地の東側で南に流れを変える旧河川が存在することが明らかになっている（図1）。この旧河川は弥生時代から室町時代まで存続しており、東土川遺跡周辺で旧羽束師川に合流するとされている¹⁾。調査地を含む大藪遺跡や、中久世遺跡、東土川遺跡などは旧河川に沿った微高地に築かれた集落であり、水系を同じくする遺跡群であることがわかってきた。

調査地の南側に接する市道向日町上鳥羽線の建設工事に伴う発掘調査²⁾では、弥生時代後期の大型竪穴住居や方形周溝墓・溝、長岡京期の建物跡・溝・柵、室町時代の下久世城に関連すると思われる居館の堀跡や建物跡を確認している（図2・22）。当調査地でも同時期の遺構の検出を予想し、発掘調査を行った。調査区は排土置き場の関係から、南北に分けて調査することとなった。

南側から調査を開始し、平安時代後期から鎌倉時代の柱穴、室町時代の居館の一部と考えられる堀と建物跡を確認した。その後、南西端で弥生時代の竪穴住居を検出し、規模を確認するために南側に拡張を行った。調査区を反転する際は、建物跡の全貌を明らかにするために、南側の一部は埋め戻さずに調査を行った。

なお、調査中に隣接する久世中学校の1・2年生が社会科授業の一環として現場の見学に訪れた。



図3 調査前全景（南東から）



図4 作業風景

2. 遺 構

(1) 基本層序と遺構の概要(図5、表1)

基本層序 調査区全体で現地表面から -0.2 ～ 0.3 m まで現代耕作土であり、以下、褐色砂質土(10YR4/4)の地山が広がっている。遺構は全てこの面で検出した。

遺構の概要 今回の調査で検出した遺構は、弥生時代後期、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代、江戸時代の4期に大別できる。主な遺構としては、弥生時代後期の竪穴住居(住居104)、溝(溝186)、平安時代後期から鎌倉時代の柱穴(柱51・139など)、室町時代の堀(溝81・90・176)、建物(建物1)、柱穴などが存在する。

(2) 弥生時代後期の遺構(図6、図版2・3)

住居104(図7～11、図版2・3) 調査区の南西角で検出した竪穴住居で、一部は調査区外である。この住居には新旧関係が確認できたため、新旧(104a・104b)に分けて記述する。

住居104a(図7、図版2-2) - 円形の竪穴住居で直径が約8.6 mである。調査区内で確認した主柱穴は4基(柱97・113・118・126)で、全体で主柱は6基存在していたと思われる。柱113には柱根が残っており、樹種同定を行ったところヤマザクラであった。壁溝は全周すると思われるが、東側の一部で壁溝を埋める階段状の盛土が見られる。当初、壁が崩れたものとも考えたが、固く締まっていることから入口の足場の可能性もある。壁溝は幅0.3～0.4 m、深さ0.15～0.25 mで、断面V字形を呈している。壁溝内には多数の小穴が確認でき、壁面の崩れを防ぐ板材を留める杭の痕跡と考えられる。埋土は単層で南側に向かってやや深くなっている。北側の埋土は現代の耕作によって削平され、ほとんど残っていなかった。床面には貼床がなされている。埋土には、炭化物・焼土が多量に含まれ、床面上には炭化材が中心に向かって放射状に残っていることから、いわゆる「焼失住居」と考えられる(図版3-1)。炭化材の中には、板材や柱材と思われる部材を確認したが、部分的であるため、住居の上部構造を復元することはできなかった。炭化材の一部は樹種同定を行い、柱材がコナラ亜属(サンプル数2)、板材がアカガシ亜属(サンプル数1)であった。

炉119(図版3-2)は、地山を掘り残した幅0.2～0.3 mの円形の炉提をもち、直径約2.5 mを測る。埋土には多量の炭化物、焼土を含み、底には、炭化物が2層にわたって厚く堆積していた。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
弥生時代後期	竪穴住居(住居104a・b)、炉119、土壇117、溝186
平安時代 ～鎌倉時代	柱穴(柱51・139・15・24・52・53・70・83)
室町時代	堀(溝81・90・176)、建物1、柱穴(柱11・84・85・86・106)

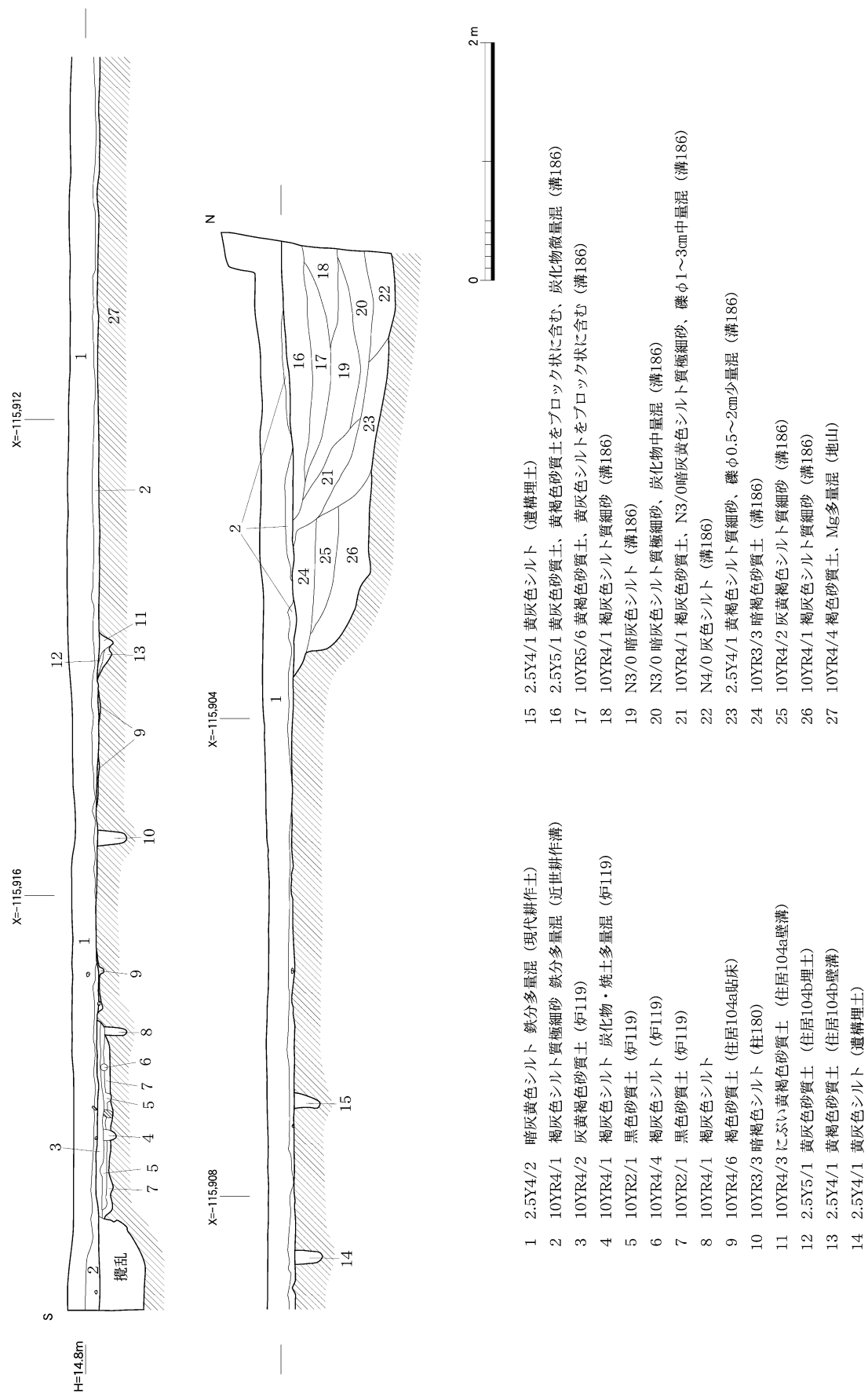


図5 西壁断面図 (1:50)

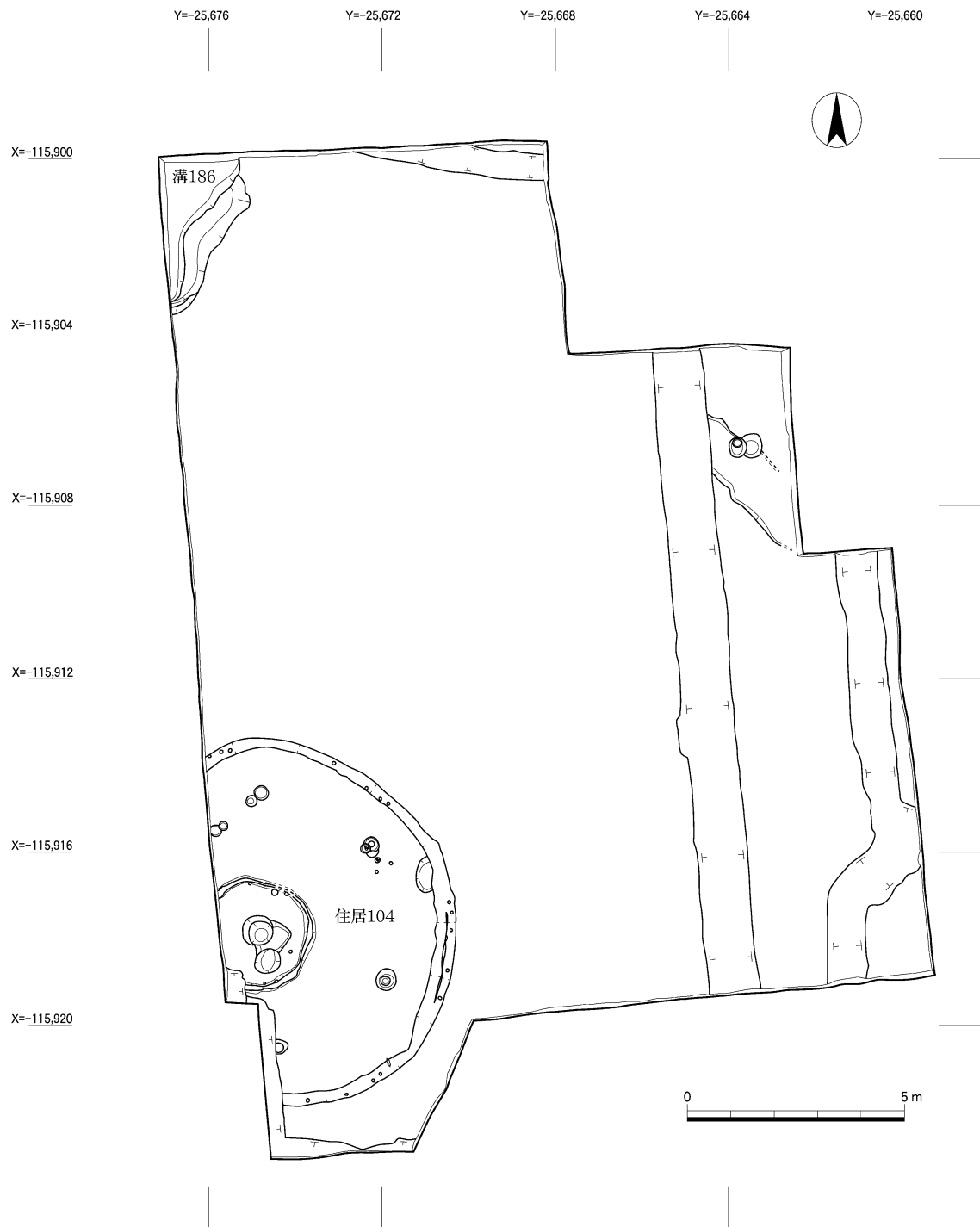


図6 弥生時代の遺構平面図（1：150）

内側には2基の土壇（炉120・121）が存在する。炉120は直径0.7 m、深さ0.7 m、炉121は直径0.6 m、深さ0.5 mある。炉120・121ともに底、壁とも焼けた痕跡はないが、埋土には炭化物、焼土が多く含まれ、下層には灰状の堆積物が見られた。湿気抜きを目的に入れられた可能性が高い。

遺物は、床面直上から出土しており、甕・壺・鉢・高杯・器台などがあるが、削平を受けているため完形品はなかった。後期中葉と考える。

住居104b（図8、図版3-3）多角形の竪穴住居で直径は約8.5 mである。調査区内で確認し

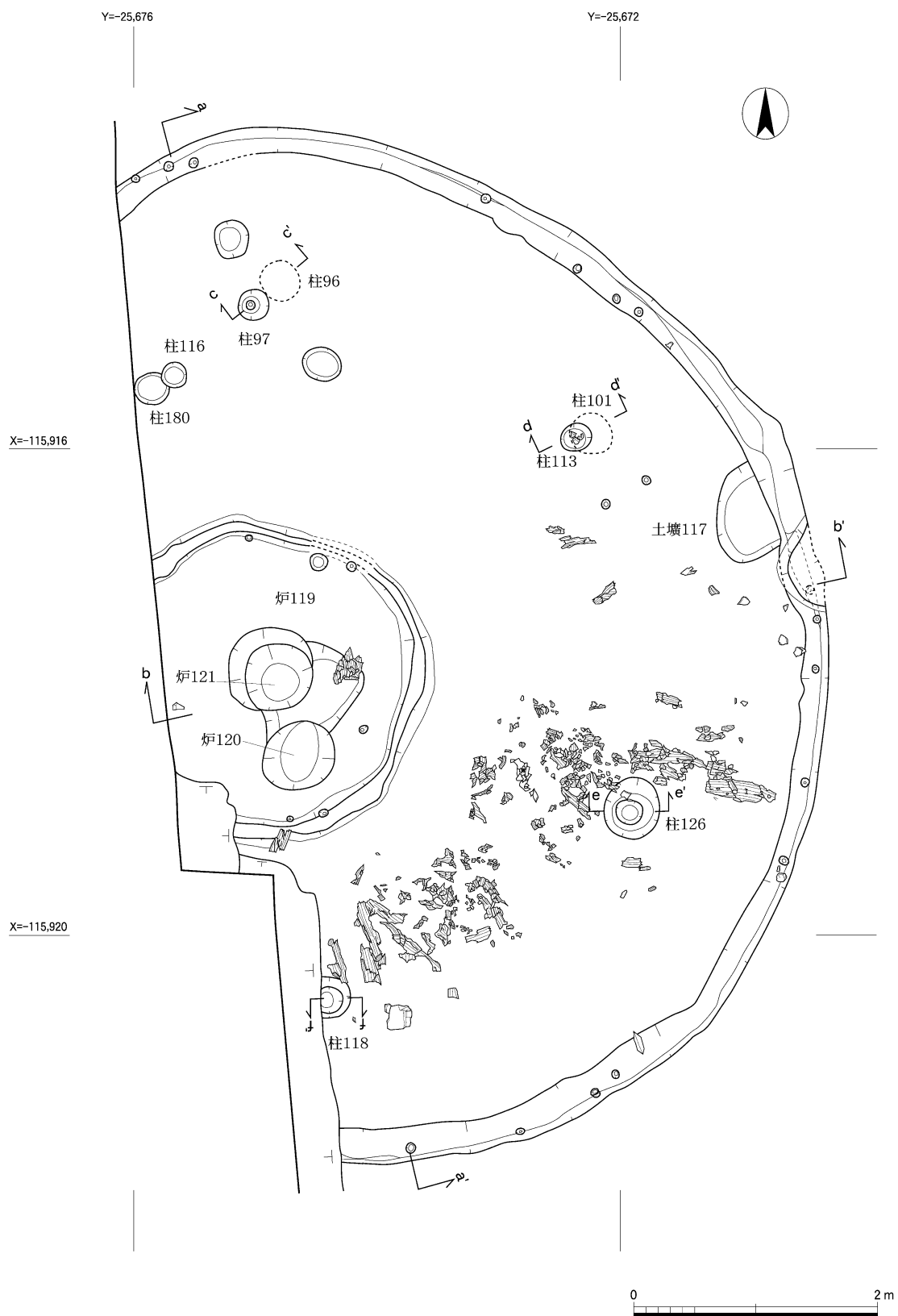


图7 住居 104a 平面图 (1 : 50)

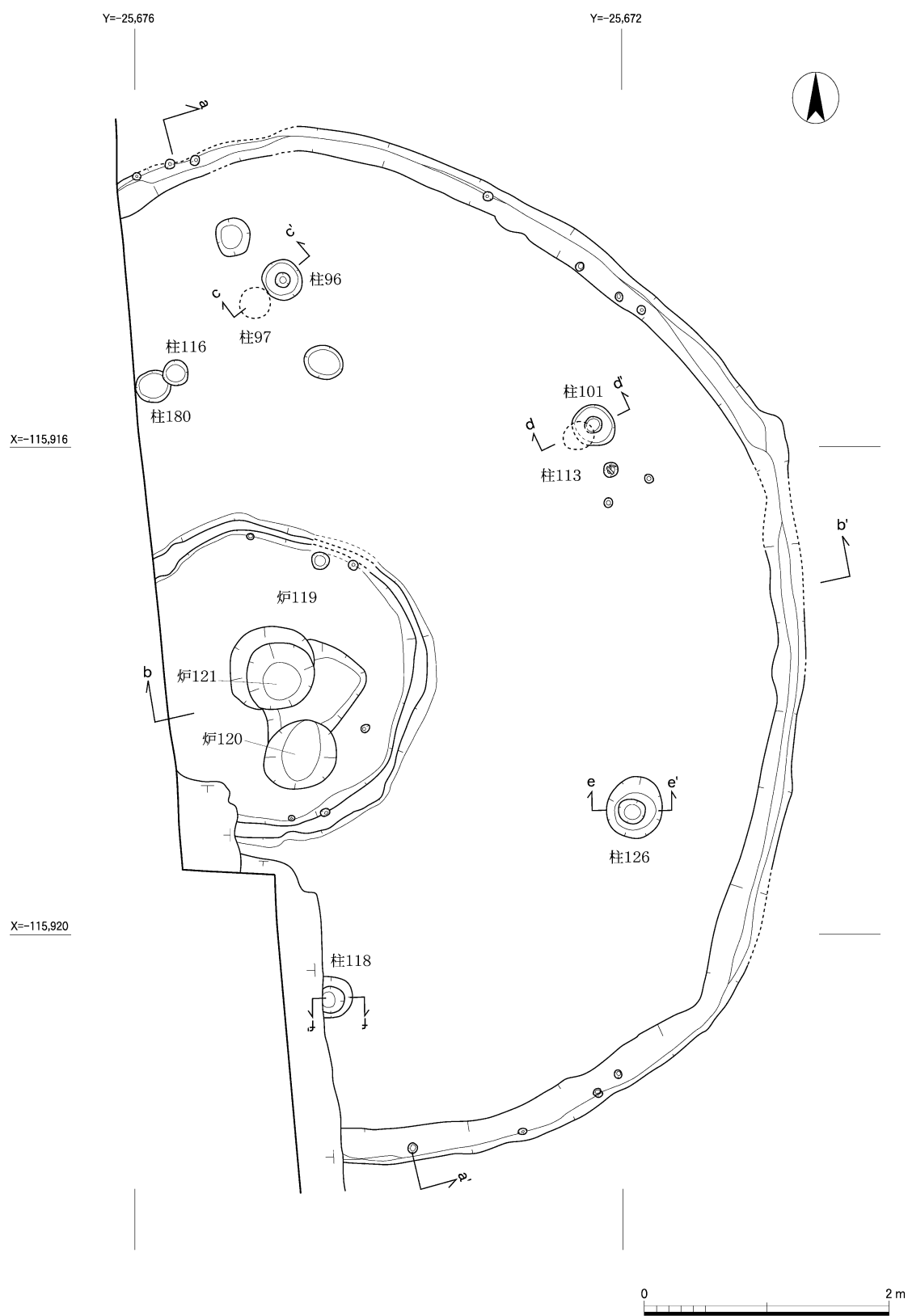


图8 住居 104b 平面图 (1 : 50)

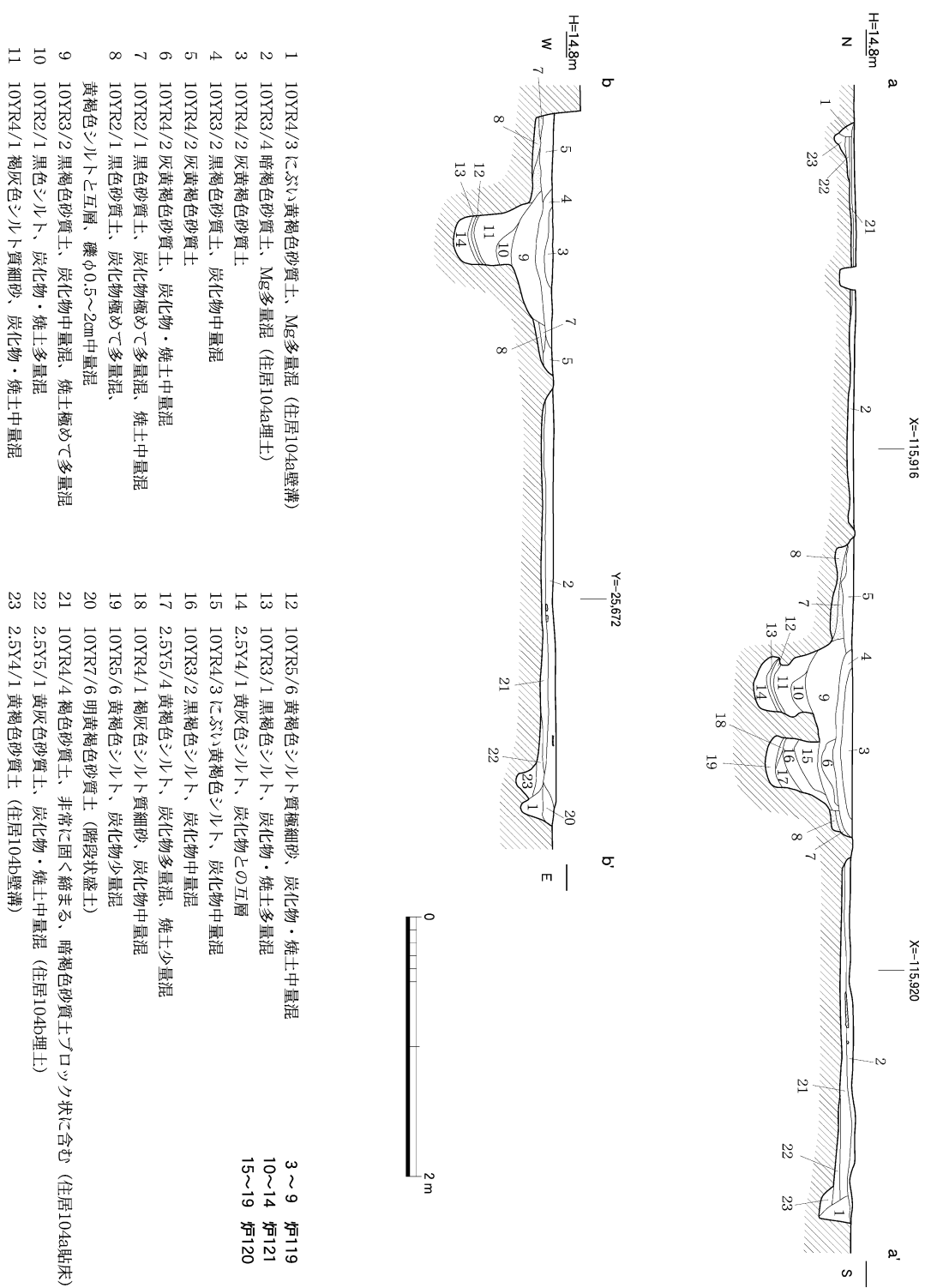


図9 住居 104 断面図 (1 : 50)

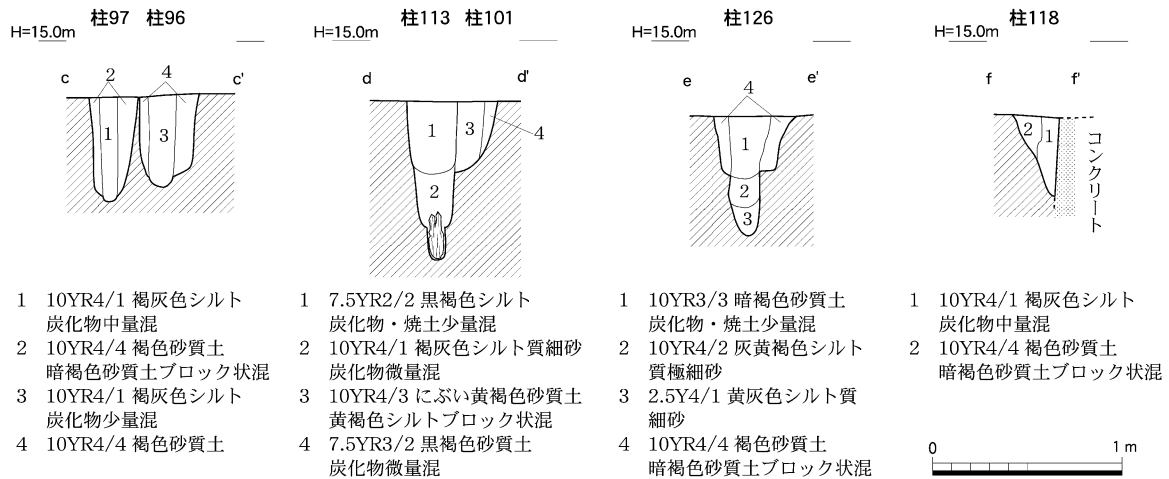


図 10 住居 104 柱穴断面図（1：40）

た主柱穴は 4 基（柱 96・101・118・126）で内、柱 118・126 は住居 104a と共有している。全体では、6 基の主柱穴が存在すると思われる。壁溝は全周すると思われ、大部分は住居 104a の壁溝とほぼ重なっている。幅は約 0.3 m、深さ約 0.2 m で、断面は V 字形を呈している。埋土は、床面が壁溝に向かって深くなっている場所で一部確認できた。埋土中には炭化物、焼土が含まれており、住居 104b も「焼失住居」の可能性がある。貼床は確認できなかった。



図 11 砥石出土状況（南から）

炉 119 も共有しており、2 層にわたって厚く堆積している炭化物の下層が住居 104b 使用時の堆積とも考えられる。

遺物は、甕などが少量出土している。遺物が少量で明らかにできないが、住居 104a とあまり時期差がなく、後期中葉と考える。

なお、住居 104a・b とともに、埋土中から多くの石製品が出土している。打製石鏃・磨製石鏃・石剣・石包丁の製品と未製品が出土している。また、剥片、敲石、砥石なども確認している。砥石は、104b の床面に掘り窪められた小穴から出土している（図 11）。主柱穴 97、118、126 の掘形からも石器が出土しており、注目できる。

溝 186 調査区北西端で検出した溝である。確認した長さは約 2 m と短く、西側の肩が調査区外であるため、全貌は明らかではないが、調査区南側の市道建設工事に伴う調査で、北に向かう溝を確認していることから、溝 186 と繋がるものと考えられる。断面観察から数度の造り替えがされている。

遺物は少量で、甕、高杯などが出土している。後期中葉を前後する時期と考える。

(3) 平安時代後期から鎌倉時代の遺構（図 12、図版 1）

遺構は柱穴が少数存在するのみである。

柱 51・139 調査区西寄りで検出した。平安時代後期の遺構である。平面形は楕円形をしており、大きさは 0.35 m × 0.5 m である。埋土は柱 51 が黄灰色シルト、柱 139 が褐灰色シルトである。ともに底からほぼ完形の土師器皿が裏を向いた状態で出土している。埋納遺構とも考えられるが、詳細は不明である。



図 12 平安時代後期から鎌倉時代の遺構平面図（1 : 150）

(4) 室町時代の遺構 (図 13、図版 1)

最も遺構数が多いのが室町時代である。居館の一部と考えられる遺構を検出した。

溝 81 (図 15) 調査区中央南端で検出した南北方向の溝である。南は調査区外に延び、北端で東に屈曲する。断面形は逆台形で、幅は狭い場所で 0.5 ～ 1.5 m、広い場所で 3 m、深さはそれぞれ 0.2 m、0.4 m である。

遺物は、土師器皿、瓦器鍋、輸入青磁などが出土している。

溝 90 (図 15) 調査区北東隅で検出した南北方向の溝である。南端で東に屈曲している。北は

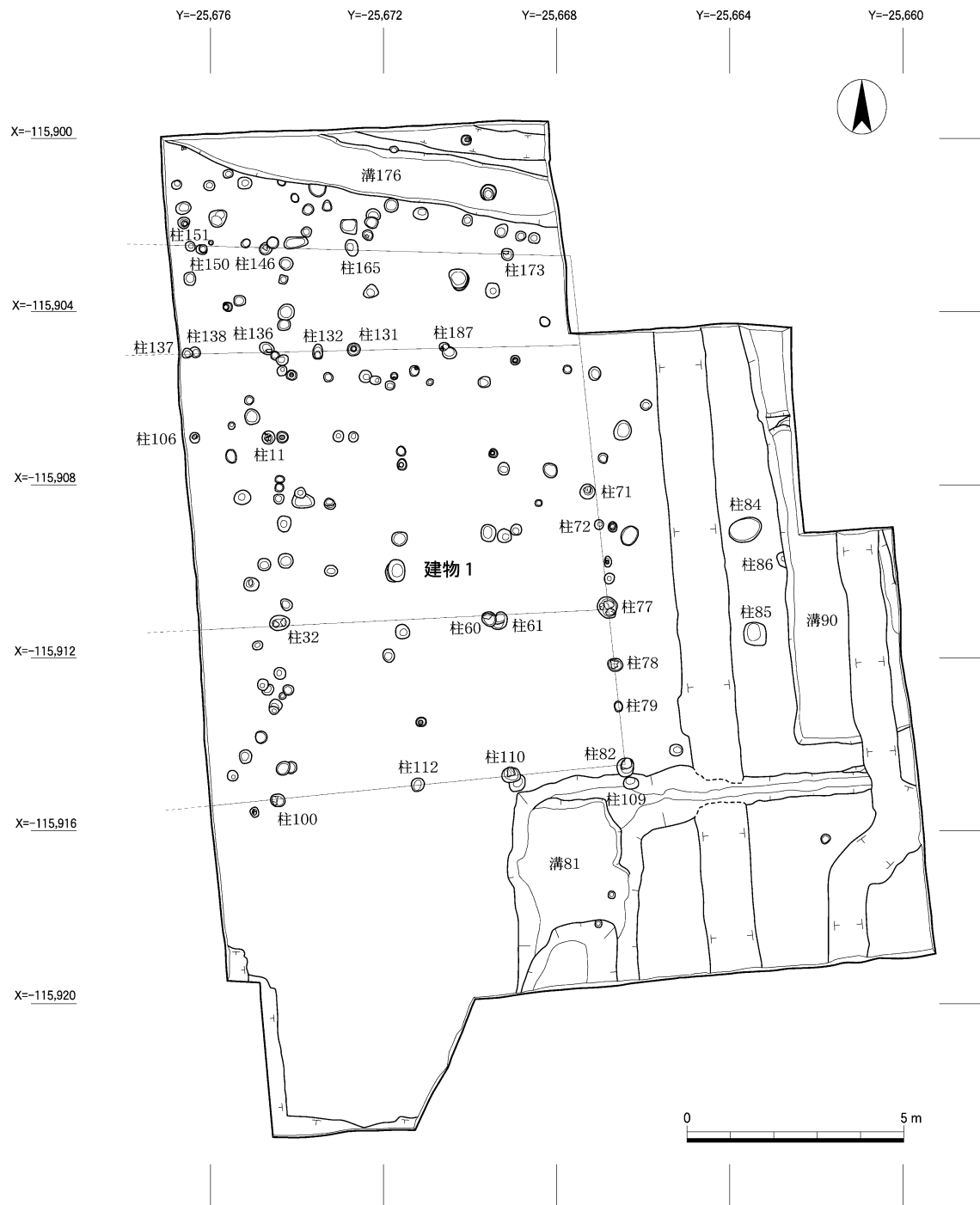


図 13 室町時代の遺構平面図 (1 : 150)

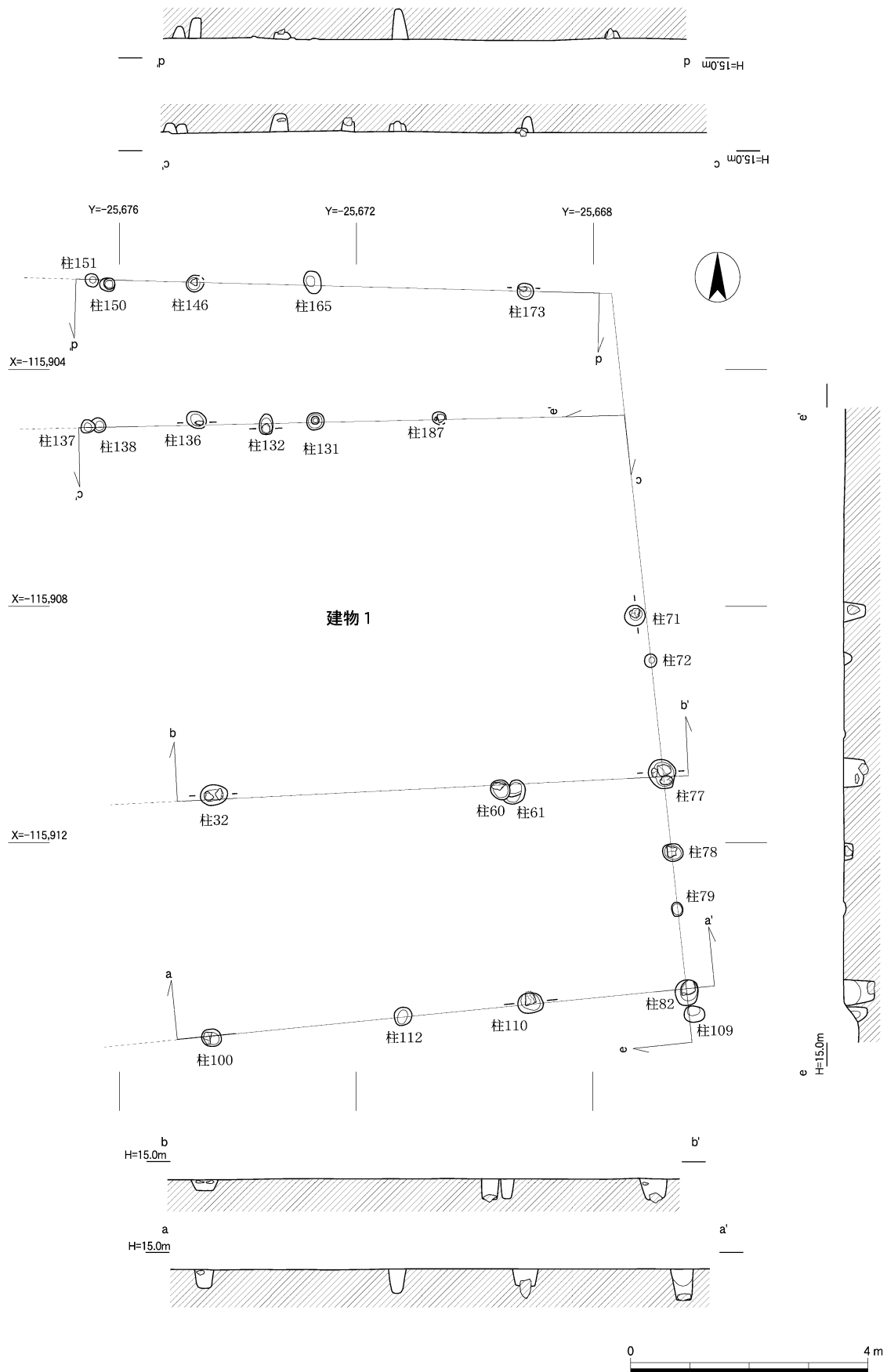


图 14 建物 1 实测图 (1 : 100)

さらに調査区外に延びている。断面形は逆台形で、幅は約 2.5 m、深さ 0.5 m である。

遺物は土師器皿、瓦器、焼締陶器などが出土している。

溝 81・90 は出土遺物から 15 世紀前半から 16 世紀初頭にかけてほぼ同時期に存続していたと考えられる。

溝 176 (図 15) 調査区北端で検出した東西方向の溝である。東端、西端ともに調査区外に延びており、東側で溝 90 に合流するものと考えられる。断面形は逆台形で、幅は約 1.2 m、深さ 0.15 m である。

遺物は細片のみであるが、土師器皿、瓦器、瓦、焼締陶器が出土している。

以上の溝は、居館を構成する堀の一部と考えられる。

建物 1 (図 14) 3 方を堀で囲まれた区画に位置する。根石をもつ掘立柱建物で南北 2 間×東西 3 間以上で南北に底をもつ建物に復元できる。

柱 84・85 居館の堀である溝 90 の西側で検出した。柱 84 は径が 0.5 m×1 m、深さ 0.2 m、柱 85 は径が 0.5 m×0.5 m、深さ 0.5 m である。

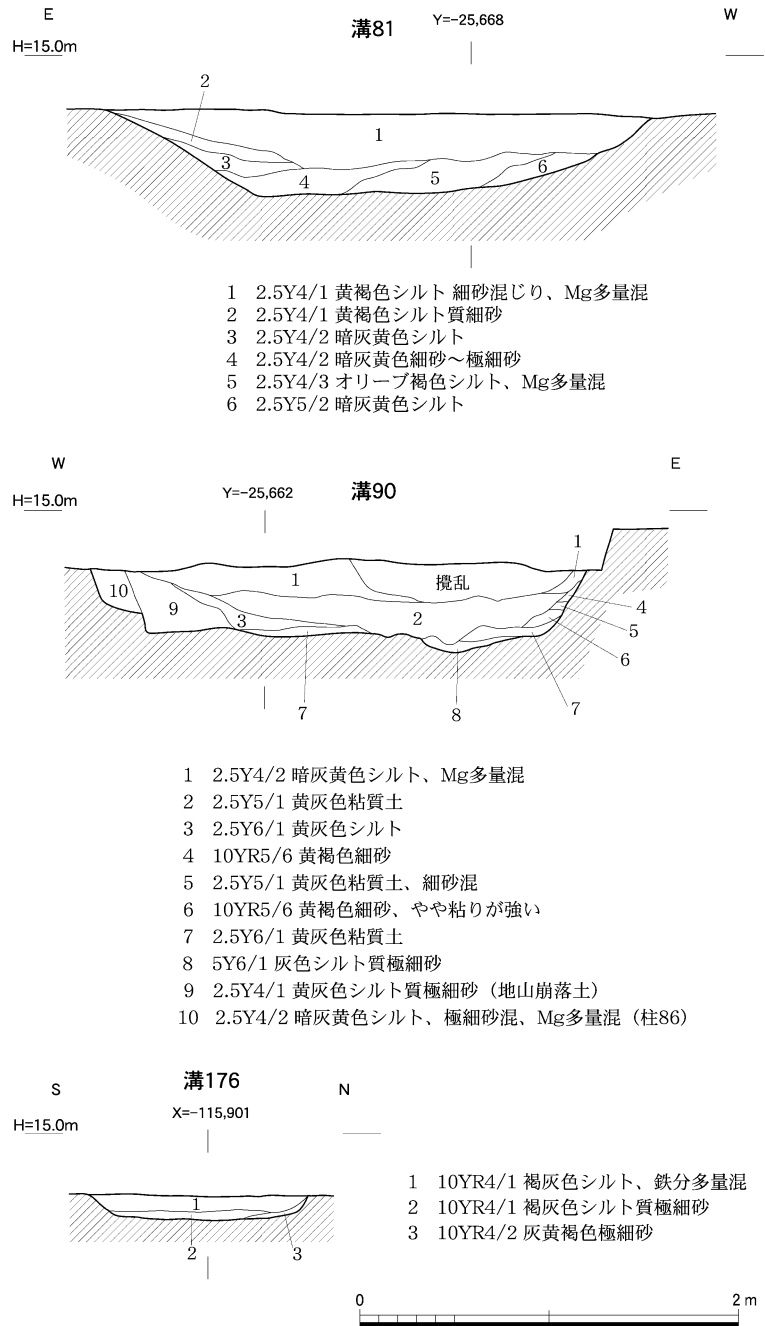


図 15 溝 81・90・176 断面図 (1:40)

3. 遺 物

(1) 遺物の概要（表2）

今回の調査で出土した遺物は、遺物コンテナにして8箱出土し、土器が6箱、1箱は木器、1箱が石器である。弥生時代から江戸時代の遺物が出土している。

弥生時代の遺物としては、住居や溝から後期の甕、壺、高杯、器台、鉢などの土器に加えて、住居から多くの石製品が出土している。打製石鏃・磨製石鏃・石剣・石包丁の製品、未製品などである。また、石器を加工するためと考えられる敲石、砥石も出土している。平安時代後期から鎌倉時代の遺物としては、柱穴から土師器皿、瓦器椀、輸入磁器、東播系陶器の鉢などが出土しているが、細片が多く、図示できるものは少ない。室町時代の遺物としては、建物や堀から土師器皿、瓦器鍋、焼締陶器、輸入磁器、平瓦などが出土している。

特徴としては、土師器皿が在地産とされるものが多い。また土師器皿と瓦器が多く、輸入磁器が占める割合が低い。平安京域とは異なった様相を見せている。

(2) 弥生時代の遺物（図16～18、図版4）

住居104a出土土器（1～11）全て床面直上から出土したものである。後期中葉に属する。1は甕の口縁部である。口縁端部に面をもち、外面は横ハケを施す。内面は摩耗が進み、調整は不明である。2も甕の口縁から胴部である。外面頸部に刺突文を施し、以下横ハケ、縦ハケとなる。内外面とも口縁部は横ナデを施す。3は壺の口縁部から胴部である。内外面共に摩耗が進み、調整は不明である。4は壺の胴部である。外面縦ハケ、内面は指オサエを施す。内面に粘土接合痕が明瞭に残る。5は壺の底部である。外面底部から胴部にかけてヘラケズリを施す。6は短頸壺の口縁か。摩耗が進み調整は不明である。7は鉢である。丁寧な作りである。外面は体部から口縁部にかけてヘラミガキ、内面は丁寧なナデである。8は高杯の杯部である。全面剥離が進み調

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
弥生時代	弥生土器、石器、木製品		弥生土器18点、石器18点		
平安時代後期 ～鎌倉時代	土師器、瓦器、焼締陶器、 輸入陶磁器		土師器5点、瓦器5点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、 輸入陶磁器、瓦		土師器4点、瓦器4点、焼締陶 器2点		
江戸時代	磁器、施釉陶器、焼締陶器				
合 計		10箱	56点（2箱）	7箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

整は不明。9は高杯脚部である。全面摩耗が進み、調整は不明。10は高杯脚部である。摩耗がすすみ調整不明。11は器台口縁部である。口縁端部にヘラ刻みを施している。調整は内外面の口縁部横ナデで、接合できなかった同一個体の観察では、体部は内面ミガキ、外面横ナデを施している。胎土、焼成ともに良好である。

住居 104b 出土土器 (12) 12は床面直上から出土した。やや丸みを帯びた壺底部である。調整は摩耗が進み不明である。

土壌 117 出土土器 (13) 土壌 117は住居 104aに伴う土壌である。13は甕の口縁部である。内外面ともに口縁部は横ナデ、胴部はハケか。

溝 186 出土土器 (14～18) 14は近江系の受口状口縁をもつ甕の口縁部である。口縁部に横ナデの後、列点文を施す。15は壺底部である。底部を除く内外面に横ハケを施す。外面には煤が付着している。16はくの字状口縁の甕である。摩耗が進み調整は不明である。17は壺の底部である。摩耗が進み調整は不明である。18は高杯である。摩耗が進み調整は不明であるが、脚部に一箇所の穿孔が認められる。

石器 (19～36) 19は凸基有茎式打製石鏃である。茎部が一部破損している。20は凹基式打製石鏃である。袖部が一部破損している。19・20ともに石材はサヌカイトで二上山産と思われる。21は磨製石鏃の先端部である。石材は粘板岩。丁寧に磨かれている。片面のみに鏑をもつ。22は有孔磨製石鏃である。石材は粘板岩。先端部が一部破損している。孔は両面から穿たれ、丁寧に磨かれている。23は磨製石鏃の未製品である。石材は粘板岩。元は石包丁の破片の可能性もあるが、石包丁にすれば薄すぎること、側面にまで研磨が及んでいることから、未製品と判断した。24は磨製石鏃の未製品である。石材は粘板岩。側面も研磨が及んでおり、挟りを形作ろうとの意識が見られることから凹基式磨製石鏃の未製品か。

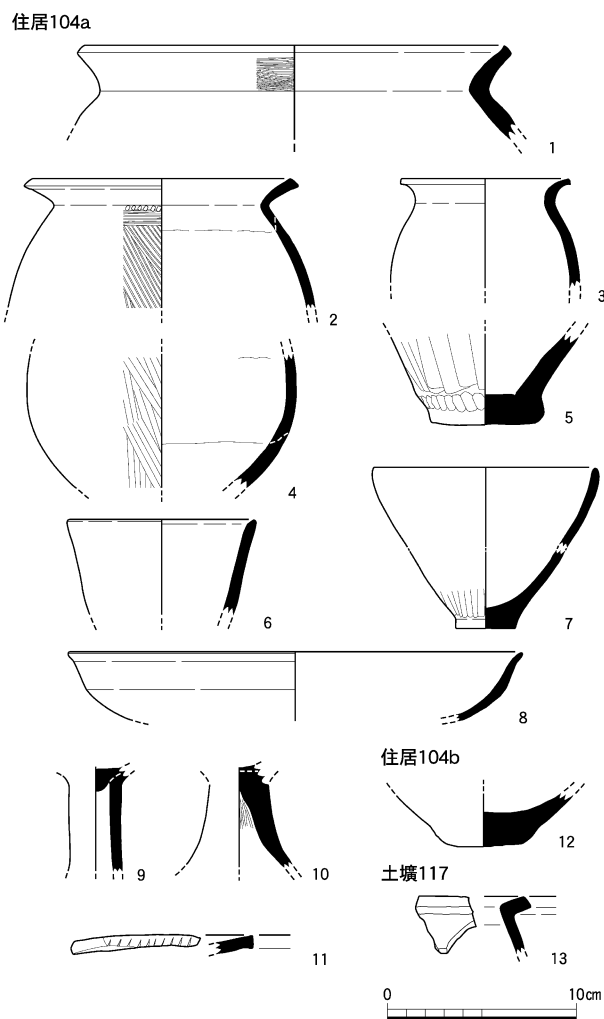


図 16 住居 104a・b、土壌 117 出土土器実測図 (1 : 4)

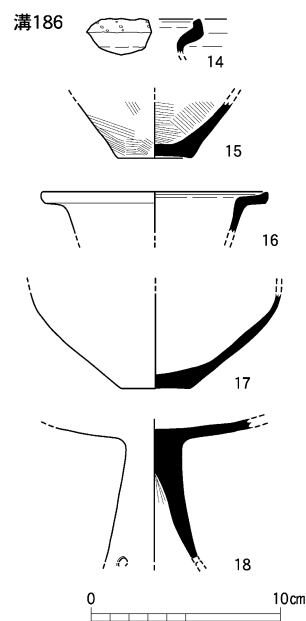


図 17 溝 186 出土土器実測図 (1 : 4)

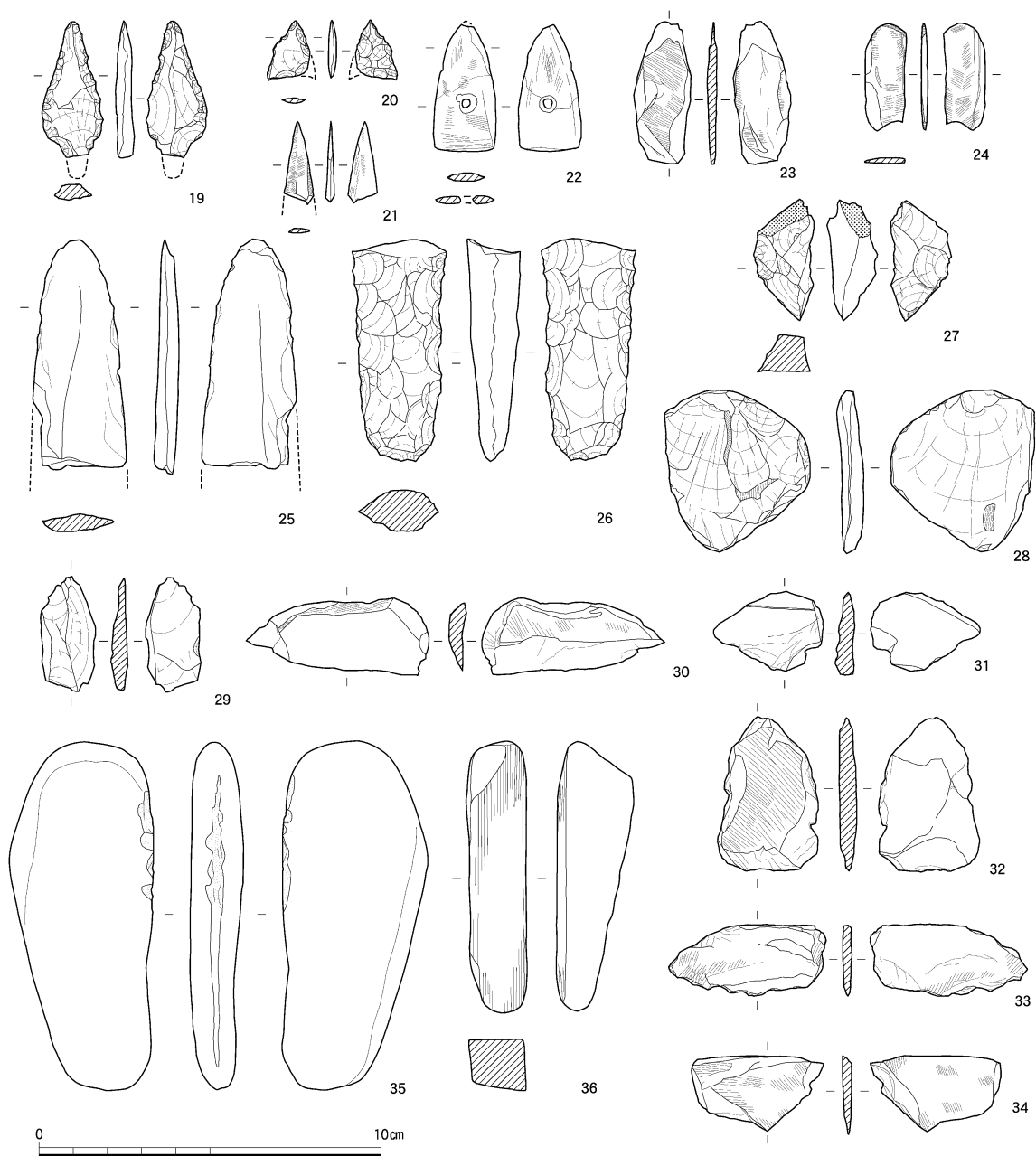


図 18 石器実測図（1：2）

25 は石剣である。石材は粘板岩。両面に鑄をもつ。刃部は刃潰していることから、実用品の可能性は低い。26 は石剣の柄か。石材はサヌカイトで二上山産と思われる。27 は楔形石器である。石材はチャート。一部に自然面が残る。剥片に剥離を加えて刃部を形成している。28 は刮器である。石材は粘板岩系。剥片に剥離を加えて刃部を形成している。刃部はあまり鋭利ではなく、擦り切る事を目的にしていると思われる。29 は縦長剥片である。石材はサヌカイトで二上山産と思われる。30 は石包丁の破片である。石材は粘板岩。両面に研磨が及ぶ。31 は石包丁の破片である。石材は粘板岩。研磨痕は残らないが片面に擦り切り技法による溝が残ることから、石包丁と判断した。32 は石包丁の破片である。石材は粘板岩で片面に研磨が残る。33 は石包丁の破片である。石材は粘板岩。両面に研磨が及ぶ。34 は石包丁の破片である。石材は粘板岩。両面に研磨が及ぶ。

35 は敲石である。石材は砂岩。側面の一部に敲打痕が残る。36 は砥石である。石材はチャート。片面が滑らかに摩滅している。長さ 7.9 cm と小さいことから手持ちの仕上げ用砥石と考えられる。

21 は住居 104 の主柱穴である柱 126 掘形から、22・24 は主柱穴の柱 97 掘形から、23・33・34 は柱 116 から、26 は炉 121 から、32 は主柱穴の柱 118 掘形から出土している。36 は床面に掘り窪められた小穴から出土している。他の石器は全て住居 104 の埋土から出土している。

(3) 平安時代後期から鎌倉時代の遺物 (図 19、図版 4)

出土した遺物は少量で、図示できるものは少ないが、土師器皿と瓦器碗が出土遺物のほとんどを占める。平安京域とは異なった状況を示しているといえる。

土師器 (37～41) 37 は柱 51 から出土した小型の皿で、口径は 9.6 cm で器高は 1.2 cm である。いわゆる「ての字状口縁」と呼ばれる口縁形態をもつ皿である。口縁部は強い横ナデを伴って屈曲、外反し、端部を摘み上げて突起状に収めている。口縁端部の断面形は三角形である。外面底部は指押さえを施す。38 は柱 139 から出土した小型の皿である。口径は 9.4 cm で器高は 1.5 cm である。37 と同様の「ての字状口縁」の皿であるが、器壁はやや厚みをもち、口縁端部を肥厚させている。39～41 は口径 7.8～11.9 cm の皿である。外面の口縁部を一段ナデで仕上げ、体部から口縁部にかけて外上方へ直線的に立ち上がるものである。40・41 は口縁端部がやや外反し、尖り気味に収めており、在地産の土師器皿といえる。39 は柱 15、40・41 は柱 52 から出土した。

瓦器 (42～46) 42～46 は全て碗で、楠葉産である。42 は口径 15.8 cm で口縁部内面に一条の沈線を施す。器表面は摩耗が進み調整は不明瞭であるが、内外面共にヘラミガキ。器壁はやや厚い。43 は口径 10.8 cm で内面に圈線ミガキを施すが間隔は粗い、内外面共に口縁部横ナデ。44 は口径 12.8 cm、器高 4.2 cm で内面には粗い間隔の圈線ミガキ。見込みの暗文はジグザグ状である。内外面共に口縁部横ナデ。口縁部は横ナデのため、外上方に直線的に立ち上がる。高台は断面三角形状で砂を多く含んだ粗い土で貼り付けている。43・44 の外面のミガキは省略されている。45・46 はそれぞれ口径 10.8 cm、器高 4.2 cm、口径 13.0 cm、器高 4.0 cm である。内外面共にミガキは省略されており、口縁部は横ナデのため、やや外反している。内面見込み部分にはハケ。高台は断面三角形状で、砂を多く含んだ粗い土で貼り付けているが、44 よりもさらに形骸化している。

42 は柱 70、43 は柱 24、44 は柱 15、45 は柱 53、46 は柱 83 から出土している。

(4) 室町時代の遺物 (図 20・21、図版 4)

遺構数が最も増加する時期であるが、全

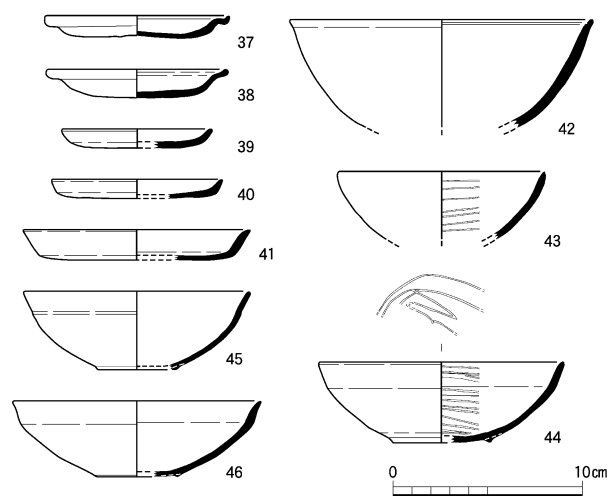


図 19 平安時代後期から鎌倉時代の土器実測図 (1:4)

体的に遺物は少なく、図示できるものは少ない。

溝 81 出土の土器 (47 ~ 49)

溝 90 と共に居館の堀と考える溝である。47・48 は土師器の皿である。それぞれ口径は 11.0 cm、

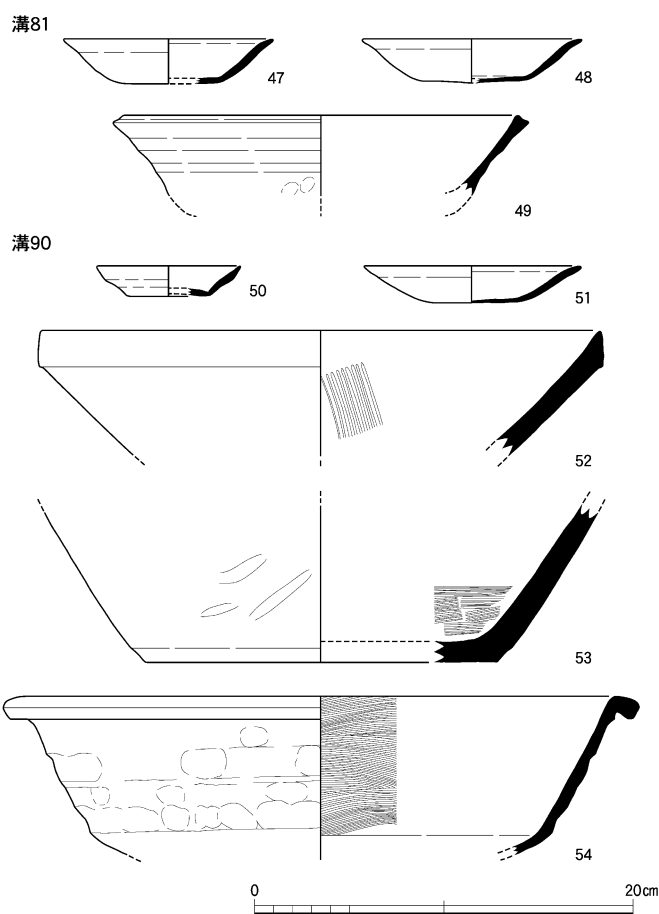


図 20 溝 81・90 出土土器実測図 (1 : 4)

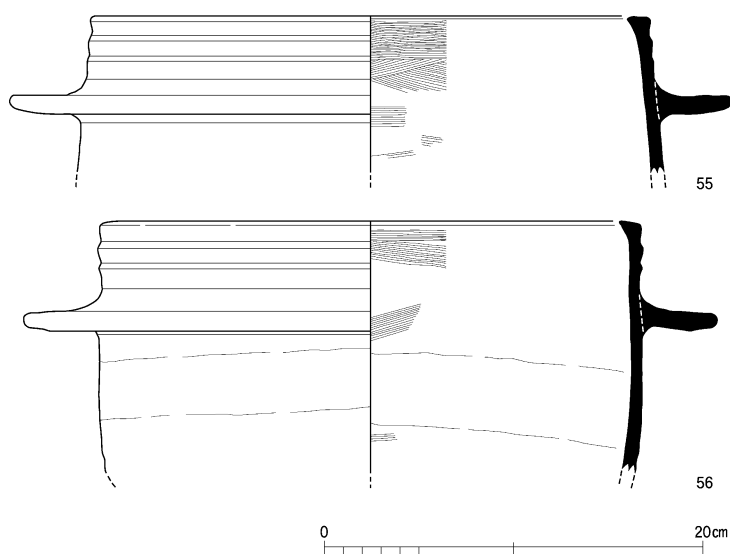


図 21 柱 11・106 出土土器実測図 (1 : 4)

11.4 cm である。47・48 は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は一段横ナデで、端部はやや外反する。48 の体部は指指オサエを施す。

49 は瓦器の鍋である。体部は直線的に開き、口縁端部は肥厚している。器表面は摩耗が進んでいるが、内面は横ハケ、外面は口縁部から体部指オサエ後横ナデ、体部下半は指オサエである。外面には煤が付着している。

溝 90 出土の土器 (50 ~ 54)

50・51 は土師器の皿である。口径は 7.6 cm と 11.5 cm である。50 は体部から口縁部にかけて肥厚し、端部の断面形は三角形状である。内面の底部と体部との境目には横ナデにより凹んでいる。外面は指オサエ。51 は器壁が薄く、体部が直線的に立ち上がる。口縁部は横ナデによりやや外反する。52 は備前焼の擂鉢である。口縁端部は上下にやや肥厚している。9 条 1 単位の擂り目をもつ。53 は産地不明の焼締陶器甕である。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。内面は横ハケ、外面は回転ナデ。外面胴部に斜め上方の指オサエが残る。丹波産か。54 は瓦器鍋である。体部は直線的に開き、口

縁部は外側に屈曲し、肥厚する。内面横ハケ、外面指オサエ。

その他の土器（55・56）共に瓦器の羽釜である。体部・口縁部は直線的に立ち上がる。端部は面ももち、やや器厚する。口縁部外面には罫あり。内面横ハケ、外面体部横ナデ。外面には煤が付着している。55は柱106から、56は柱11から出土している。

4. ま と め

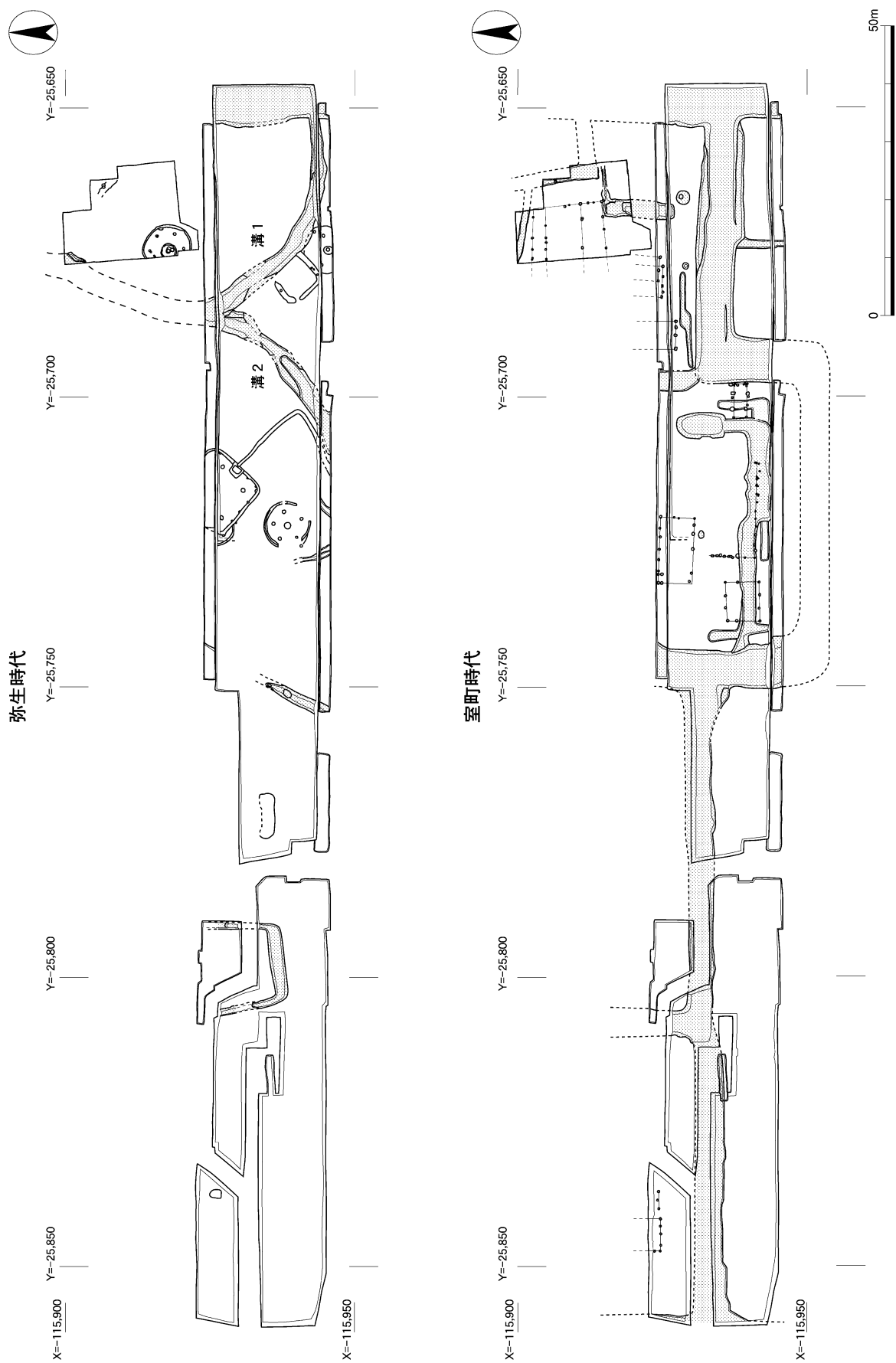
今回の調査では、弥生時代の竪穴住居や溝、室町時代の居館の一部である堀や建物を確認し、これまでの調査成果を踏まえて、より具体的な姿を明らかにすることができた。

弥生時代の遺構としては、竪穴住居（竪穴104）を検出した。この住居はいわゆる「焼失」住居で、住居内の遺物が炭化材の下敷きとなっていたことから、失火で失われた可能性が高い。住居の特徴としては、直径8.6mと一般的な住居よりも大型で、中央部分に直径2.5mにおよぶ巨大な炉（炉119）を有している。炉堤は土を盛り上げて成形したものではなく、地山を掘り残して成形されたもので、極めて計画的に配置されたことをうかがわせている。また、内部には防湿のために灰を敷き詰めたと見られる土壇（炉120・121）も存在する。こうした計画性や炉の規模は、炊事に伴う煮炊きが目的の炉とはそぐわず、火を用いた工房施設を想定させるものである。また、前身となる住居（竪穴104b）も焼失しているとみられ、ここでは恒常的に火を用いた工房が営まれていた可能性が高い。今回、鍛冶場を想定して炉の埋土を持ち帰り、洗浄を行って精査したが、関連する遺物を見つけることはできなかった。また、一方で住居の埋土からは打製・磨製石鏃、石剣・石包丁などの製品や未製品、破損品と共に剥片や敲石、砥石といった石器加工に伴うとみられる遺物が多く見つかった。石材となる原石や石核は出土していないことから、ある程度加工した製品を仕上げる工程に伴う遺物群と考えられる。これらの遺物群と先の炉跡との関連は不明であるが、この住居は何らかの工房施設である可能性が高いと考えられよう。

弥生時代の遺構には、住居の他に溝（溝186）を確認している。確認した長さは短いものの、南側で行われた調査で確認した溝の延長部分と考えられる（図22）。今回確認した溝186がその溝1か溝2に対応するかは不明である。

弥生時代の大藪遺跡は、これまでの調査で確認された自然流路沿いの微高地に築かれていたことがわかってきた。この自然流路流域の微高地には大藪遺跡以外に中久世遺跡、東土川遺跡など多くの集落が存在しており、大藪遺跡の性格を考える際には、付近の集落と合わせて総合的に考える必要がある。

室町時代の成果としては、南側の調査で検出された居館の一部を確認し、居館の広がりを明らかにすることができた（図22）。調査区では、西を除く三方に堀を検出し、堀に囲まれた区画内に建物を確認した。東側の堀（溝90）は埋土の堆積状況から水堀と考えられ、東に存在した旧河川から水を引き込んでいたと考えられる。また、北側の堀（溝176）は居館の北限を示す可能性のあるものであり、居館の復元を考えるうえでも注目できる。調査区の西隣には現在でもわずかに地表面の高まりがあり、南側の堀も二重であるのが明らかになっていることから、主要区画と



考えられ、今回の調査地は主要区画に付随する区画であると想定できる。この居館は、流路を巧みに配置した構造であることが明らかとなった。今回確認した遺構は、下久世城館との関連を十分窺えさせるものである。今後の調査でさらに具体的な姿を明らかにしたい。

註

- 1) 旧河川を確認した主な調査には、以下のものがある。

『大藪遺跡』六勝寺研究会 1972 年

磯部 勝「大藪遺跡」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983 年

堀内明博・鈴木廣司「大藪遺跡」『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985 年

長宗繁一「長岡京跡・東土川遺跡 (NG 3)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 60 年度 京都市文化観光局 1986 年

上村和直・久世康博「大藪遺跡」『昭和 60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988 年

鈴木廣司『大藪遺跡発掘調査概報』昭和 62 年度 京都市文化観光局 1988 年

吉崎 伸『中久世遺跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990 年

- 2) 西大條 哲ほか「大藪遺跡」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財研究所調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000 年

図 版

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおやぶいせき							
書 名	大藪遺跡							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2 0 0 6 - 3 2							
編 著 者 名	西森正晃							
編 集 機 関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発 行 年 月 日	西暦2007年 3 月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおやぶいせき 大藪遺跡	きょうとしみなみく 京都市南区	26100	773	34度 57分 17秒	135度 43分 08秒	2007年 2 月 1 日～2007 年 3 月 8 日	295m ²	建物新築 工事
	くぜとのしろちょう 久世殿城町		776					
しもくぜじょうあと 下久世城跡	527-1、528-1、 814-3							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大藪遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居、炉、土 壙、溝		弥生土器、石器、木製 品			
下久世城跡	平城跡	平安時代後期 ～鎌倉時代	柱		土師器、瓦器、焼締陶 器、輸入陶磁器			
					土師器、瓦器、焼締陶 器、輸入陶磁器、瓦			
		江戸時代	堀、建物、柱		磁器、施釉陶器、焼締 陶器			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-32

大 敷 遺 跡

発行日 2007 年 3 月 31 日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961